

あなたの夢を、暮らしを応援する住宅情報紙



かふう

毎週金曜日発行

2018.1.5

Vol.639・640 合併号

<http://www.kahu.jp>

かふう

新報リビングニュース



こんな家に住みたい
新春スペシャル

地域・エコ・省エネ サステイナブルな家づくりを展望



Kahu New Year Special
かふう新春号
スペシャル

- 5 伊礼智の「僕の好きな風景」
建築の光
- 6 2018 干支企画
今年こそ、犬に注目!
- 10 石獅子探訪記
迷路クイズ「石獅子の森」
- 11 空中散歩「天空から眺める美ら島風景」
「千年紀(ミレニアム)」の初日の出
- 12 新春インタビュー
研鑽の2017年と飛躍の未来
- 23 かふう週報
- 24・25 かふうお年玉
アンケート・プレゼント

琉球新報

発行/琉球新報社
〒900-8525 沖縄県那覇市天久905
☎098-865-5014

企画・編集・制作/(株)正広コーポレーション
〒900-0004 沖縄県那覇市銘苅1-11-9
☎098-941-8112

購読のお申し込み **0120-39-5069**

「かふう」とは、『沖縄語辞典』によれば「果報。幸運(にめぐり合うこと)」とあります。「かふう」であなたの幸せを見つけてください。



こんな家に住みたい

新春スペシャル

地域・エコ・省エネ

新年の幕開けに

サステイナブルな家づくりを展望

風土に根ざした建築とは何か。環境にやさしく、エネルギーにも配慮した、持続可能な建築とは何か。建築をめぐって「地域」「エコ」「省エネ」といった言葉が使われるようになって久しく、今現在も盛んに語られていることではあります。少し距離を置いて歴史を俯瞰してみると、新たな視座が開けるかもしれません。沖縄で40年以上にわたって設計活動が続けてきた建築家・佐久川一さんの作品とともに、本土復帰から現在までの流れを振り返ってみます。

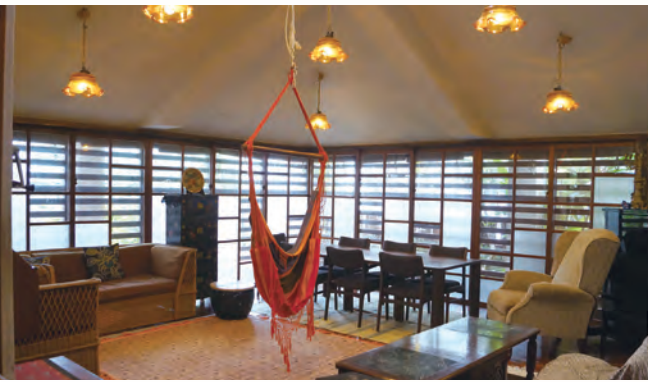
1970から80年代初頭
地域に根ざした建築の
あり方を探る

1972年の本土復帰、75年の海洋博開催など、70年代は沖縄の社会のあり方が大きく変わった時期。各市町村は今後のまちづくりの方向性についてこぞって指針・計画を作成し、その中で「地域」を中心に据えたのが名護市でした。背景には、70年代初頭から主にやんばるの集落でフィールドワークを続けてきた「象設計集団」の影響があり、78年に実施された名護市庁舎の公開コンペでは、全国から集まった300超の応募の中で同グループが第一位を獲得。つまり地域中心の考え方は、ここで都市計画から建築の分野にも引き継がれました。（市庁舎の完成は81年）

以前から風土に根ざした建築を志向し、エコ的な視点をどう設計に反映させるかを模索していた佐久川さんは、70年代半ばに象の活動に参加。プロジェクトリーダーを務めた石川市（現うるま市）の海浜公園

では、建築材料として初めて琉球ガラスを採用。個人建築家としてのデビュー作となった78年「風水の家」では、冷房設備に頼らない自然通風システムを導入し、この手法は名護市庁舎の設計にも取り入れられました。

こうした一連の工夫に見られるように、佐久川さんの主眼点は、いわゆる「ローテク」の技術を活用しつつ、「パッシブクーリング（自然冷房装置）の仕組みを建築全体で考え、設計・デザイン的手法でどこま



でそれを実現できるか」にあり
ました。例えば前述の風水の家
では、取り込んだ風と光が家中
に巡り、天井高を最大限に生か

して熱の対流を促すような断面計画を考えました。また83年「山の家」では、屋根瓦の代用になる断熱素材として、寄棟のコンクリート屋根に土を敷き、その上に芝生を造成しました。



1. 「風水の家」(1978年)。無双戸や床下から1階大広間へ風を取り込み、吹き抜けや「風の塔」を通して2階まで送り込むような空気の流れを計画
2. 「山の家」(1983年)。1日の太陽の巡りに応答するように円状の空間を構成。屋根に載せた土は効果的な自然の冷却装置
3. 「海の家」(1983年)。「山の家」との対概念で設計し、サンゴ石を屋根瓦に代用。2. 3. とともに日常生活のレベルで自然のサイクルが感じられます

1	
3	2



1980年代半ばから90年代 混沌さを増す時代に「沖縄らしさ」を問う

いわゆる「バブル景気」の発端といわれるのが86年12月。世の中にはモノがあふれ、建築の分野でも新しい素材・製品が続々と誕生し、「ますますローテクが忘れ去られようとしていく」風潮が強まりました。世界的な建築の潮流でいえば、多様性と時代性を志向する「ポスト・モダニズム」が一斉を風靡した時代。バブル期の華美な装飾も、多様性と時代性の象徴の一つであると受容され、同じような理由から、幾つかの特徴ごとに建築を形式化・様式化する傾向が生まれました。

一方では沖縄の社会全体に、「沖縄の魅力や独自性を対外的にもっと発信すべきだ」との機運が芽生え始めました。以前から「沖縄の空間概念を正確にと

らえるには、古くから使われてきた方言で言い表したほうがしっくりくる」と考えていた佐久川さんは、86年「チンボーラ（巻き貝）」、91年「モーイユ（野原を表すモーと魚を意味するイユ、あるいは踊りのモーイと世のユを組み合わせた造語）」など、作品名まで方言で命名。設計スタイルは「風水の家」から一貫しており、身近に手に入る再生可能な材料を極力用い、ローテクを駆使して住み心地を追求しました。

この頃の作品を見ると、チンボーラにしろモーイユにしろ、コンクリートブロックを多用して多彩な造形に仕立てた住宅が目につきます。これは増加を続ける鉄筋コンクリート(RC)造への反発ではなく、「RC

造は躯体打設時に、型枠として膨大な数のベニヤ板を使用するため、環境に対してもエネルギー面でも負荷が大きいと感じていた」ことが大きな理由です。その点を除けばコンクリートという素材自体は、今や沖縄の建築に欠かせない存在であり、「身近に手に入る」ことは大きなメリットです。

2000年〜現在 木造の普及。沖縄に適した省エネ住宅とは

佐久川さんが木造を初めて手がけたのは95年の奄美大島の住宅でした。それ以前も環境に優しい材料として、施工側から要望が挙がるのが度々ありましたが、条件・態勢がなかなか整わず実現には至りませんでした。

沖縄での木造初設計は2000年を過ぎてから。その頃になると県外のプレカット工場で加工した木材を沖縄へ運搬し、地元の人々が組み立てるという流れが徐々にできあがってきました。その後は現在に至るまで、年を追うごとに木造は増加の一途をたどることになります。一方では台風やシロアリへの懸念から、構造の中心部分はコンクリート造にして、上部の屋根やその他の壁を木造にする混構造の建築も多くつくられました。

05年に完成した「玉水の家」も混構造の作品です。ここではさらに、集落の祭祀と深い関わりのある「親カー（井戸）」と近接し、敷地内にも古井戸が残る環境だったことから、雨水・地下水の活用を図るとともに、「水」をテーマに全体のプランを作成。「例えば雨水の再利用を考えれば、おのずと屋根の形状にも影響が及ぶ。光、風と合わせて、建築にもっと水を取り入れたい」と思わせるきっかけになりました。

また最近では住宅の環境負荷やエネルギー効率率が、詳細に客観的な数字で示されるようになっていきます。とはいえ「開口部を少なくして高断熱・高気密にすることが、蒸暑地である沖縄で果たして本当にエコな

のか」とはよく指摘されることです。佐久川さんは現在施主の依頼を受け、ドイツの性能認定基準に基づく省エネ住宅「パッシブハウス」の設計に取り組みでいますが、これは従来の設備・材料に依存した一般的な省エネ住宅とは異なり、その土地の気候や条件に合わせて、設計・設備・材料などをトータルに評価する点が大きな特色です。ただし認定基準は極めて厳しく、完成すれば沖縄では一棟目。佐久川さんは「最新の科学的な知見を集めた建築手法に、これまでの私の経験をプラスして、次につながるものが生まれれば」と話しています。



上。「モーイユ」(1989年)。構造柱兼目隠しの役割を持つコンクリートブロックの壁を屏風のように並べて、内と外の際(きわ)の優しさを表現



右。「チンボーラ」(1986年)。ヒンプンの仕切りの要素とテラスの機能を備えた半戸外の「ヒンプンテラス」を正面に置き、配置計画をまとめました



「玉水の家」(2005年)。敷地北側の古井戸を水回りに中心とし、南側の「風の庭」には雨水を利用した池を置き、南北ひとつながりの水のラインを構成

「自分の手を加えられる」大切さ 身近にある材料を家づくりに生かす

佐久川さんの特徴的な設計スタイルの一つに、「身近な環境から手に入る材料を極力用いることで、将来にわたって再生可能な家づくりができる」という考え方があります。もともと「そこ」にある材料を使うから環境にやさしく、大がかりな運搬が不要のためエネルギー効率にも優れています。ここでは過去の作品の中から、積極的に採用してきた材料を幾つか紹介します。

◇ 土 壁

建設地、あるいは近隣の土地から掘り起こした土に、砂とセメントを混ぜて固めます。赤土は、沖縄ではどこでも入手しやすい環境にあるため、原料に困ることはありません。ひび割れを防ぐために月桃など植物の繊維を加えたり、最近では廃ガラスからつくられた多孔質軽量発泡資材を加えたり、状況に応じてアレンジしています。



◇ 竹

竹は古くから内外装材や茅葺きの材料として使われてきました。構造材に使われる木は育成に時間がかかり、現在の沖縄では入手が困難であるのに対し、竹は成長が早く、短期間で繰り返し生産できる点が最大のメリットです。ただし傷みが早い用途の選択には要注意。2001年「首里の家」では照明器具に使用しました。



◇ 琉球ガラス

1970年代半ばに石川海浜公園で、板状に加工した琉球ガラスとコンクリートブロックを組み合わせて使ったのが建築材料としての始まり。住宅では最初期の78年「風水の家」から導入。特有の厚みや気泡には手作り感があり、工業製品とはひと味違った温かい雰囲気演出します。一枚ずつ手作業で加工するため、コスト面の調整が必要なケースもあります。



◇ 漆喰

石灰に水、のり、藁スサを混ぜてつくる、なじみ深い塗壁材。調湿性、消臭性といった機能性に加え、仕上げ方次第で多様なテクスチャを表現できます。「気分次第でいつでも塗り替え可能。工業化が進んだ現在の住環境で、自分の手が加えられる場所を残しておくことは大切ではないか」と佐久川さんはいいます。



<プロフィール>

佐久川一（さくがわはじめ）

1947年 那覇市出身

1970年 早稲田大学理工学部建築学科卒業

1975年～80年 象設計集団のメンバーとして活動

1982年 一級建築士事務所アトリエガイイ設立

<一級建築士事務所 アトリエガイイ>

宜野湾市真志喜 3-21-11 3F

tel. 098-897-1379

<http://www.atelier-gaii.com/>